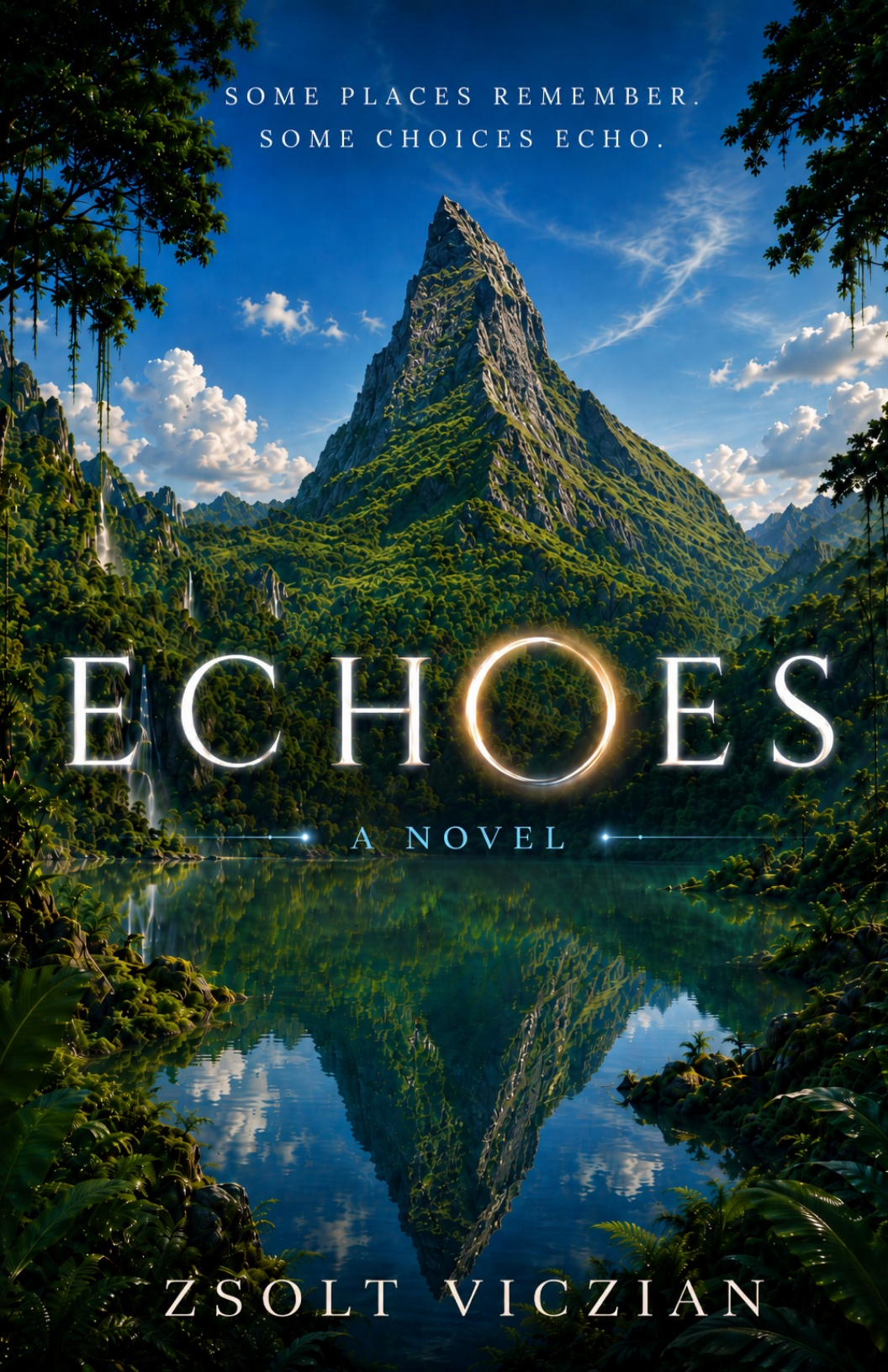




SOME PLACES REMEMBER.  
SOME CHOICES ECHO.

# ECHOES

— — — — —  
A NOVEL — — — — —

ZSOLT VICZIAN

# 第1章：Nia

いま、どうやってあの地中の曲線にたどり着いたのかと聞かれると、私は氷の境界線を笑った教室の話から始める。四十五年前のことだ。

最後の堆積物トレーを並べ終える前に、最初の学生がラベルを上下逆さまに読もうとした。

「待ったほうが、もっと学べるわよ」私は言った。

「先生がちゃんと書いたか確かめてるんです」

「それなら、もう授業は始まってるみたいね」

教室が埋まるころには、前の実験台に浅いトレーが十一枚並んでいた。丸く削れた石、湖底コアから取った淡い粉、片面に引っかき傷の走る黒い岩片、真ん中から割れた赤土の帯。窓の外には、灰色の稜線近くまで木々が這い上がり、その間に霧が漂う濃い緑の景色が広がっている。どの標本も、そんな景色に釣り合うようには見えなかった。だからこそ私は使った。

赤土を掲げた。「これは湖の底に沈んだものです」

窓際の学生が身を反らし、中庭の木々の向こうにある稜線を見た。「暖かい湖？」

「冷たい湖」

「どれくらい？」

「上流谷では、どの季節にも氷が残るくらい」

二人が笑った。三人目は声を上げて笑い、慌ててノートで口元を隠した。

私は谷の断面図を描き、昔の氷の境界線を入れた。今度は教室じゅうが笑った。あの斜面なら、みんな知っている。その線は研究所も、下の段々畑も、席から見える山の半分も呑み込んでいた。

縮尺を確かめた。

それから線を、さらに上へ動かした。

笑いが止まった。

質問が一斉に飛んできた。どうしてそんなことが分かるのか。何が残っていたのか。この建物も氷に覆われたのか。一列目の学生が

とんでもない深さを口にし、隣の学生の顔にはもう笑みが浮かびかけていた。

「どうしてその数字を選んだの？」私は聞いた。

彼女は私の図にある谷の幅を指した。「氷が盆地いっぱい詰まっていたなら、圧力で両側はもっと高くなるはずだから」

「数字は大きすぎる。でも考え方は使える。その考え方は残して」

隣の学生の笑みが袖の中へ消えた。

断面図から証拠へ移った。引っかけられた基盤岩。どんな川でも転がせないほど遠くから運ばれた異地性の巨礫。氷がしばらく止まった場所に残った尾根。そうした痕跡は、学生たちもすんなり受け入れた。大きくて、嘘をついていないように見えるのだ。

厄介だったのは赤土だった。

標本を読み取り装置の下に置いた。背後の壁いっぱいに、拡大された粒が映った。明るい鉱物片、空隙、埃ほどの大きさしかない黒い斑点。標本の横に方位磁針を置き、小さな磁石を針が動く距離まで近づけた。

「泥が沈んでいくあいだに、この黒い粒の一部は向きをそろえしました。その時代の磁場の方向を記録したんです」

「その向きのまま残ったんですか？」

「条件がよければ」

「どのくらい？」

「熱、圧力、水、化学変化、かく乱。そのどれかが、向きを変えただけのもっと強い理由を与えるまで」

その答えは不評だった。

一人が、昔の寒冷期を復元すれば盆地の次の気候変動を予測できるのかと聞いた。地域規模の変化と局地的な応答を分けて考えられるなら役に立つ、と答えた。そのあと、彼女のペンは速く動いた。

氷の境界線を消し終わる前に、終了の合図が鳴った。椅子が床をこすったが、学生たちは出口ではなくトレーの周りに集まった。

最初に私のラベルを調べた学生が、また手を挙げた。「その粒が、たまたま同じ向きに落ちただけじゃないって、どうして分かるんですか？」

私は赤土を見て、それから彼女を見た。

「その反論を次の授業に持ってきて。そこから試験を組み立てましょう」

開いた窓越しにも聞こえるほど強く、暖かい雨が外の葉を打っていた。学生たちは偶然について言い争いながら教室を出ていった。

Maraは盆地の観測点地図を休憩室のテーブルいっぱいに広げ、濡れた角をひびの入った緑のカップで押さえていた。講義室から廊下を少し下っただけの場所で、扉はまだ開いている。笑い声も、そのあとに続いた質問も聞こえていたはずだ。

「信じ込ませたわね」

「疑い方を、もう少し正確にただけ」

「あなたはそれを『信じさせる』って呼ぶのよ」

パンを運んできた若い男が、やかんの横に置いて下がった。Maraは機材台帳を読みながら一切れちぎり、地図の上にパン屑を散らした。ほかの人がやったら必ず文句を言うような手抜きだった。私はパンを測量ルートから遠ざけた。

私たちが知り合ったのは七年前、昼食前に人前で互いの間違いを訂正し合ったときだった。それでも続いた友情が役に立つのは、結果のいちばん弱いところから見つけてほしいとき、私が真っ先に見せる相手が今もMaraだからだ。

南側の中継器は、筐体の中に虫が巣を作ったせいで故障していた。交換用マストは、夜明け後最初の貨物列車に載せられる。Maraは出発時刻を二重に丸で囲み、いちばん担いで歩く距離の長い観測点を自分に割り当てていた。

「いちばんひどいルートを自分にしたのね」

「朝の四時に、あなたが突然やさしさに目覚めるのを防いだの」

「例の回、見逃したでしょ」

「見逃してない」

「隊長は峡谷で死ななかった」

「知ってる」

「じゃあ見たんじゃない」

「二回」

Maraが顔を上げた。「三週間、誘いは全部断っておいて、装備の悪い架空の研究者が崩れる橋を渡るのを二晩も見てたわけ？」

「橋の場面は構造的には正しい」

「橋、落ちるけど」

「だからよ」

テーブルに触れていた手首端末が光った。Tarinから、作りかけの葦の枠の写真が届いていた。上の弧が、それを映すための粘土の水盤から外側へ傾いている。

編んだ葦じゃ出ないって言ってた音がする。それと、夕食までに帰る？ 暮らしの件、決めないと。

枠のほうは簡単だった。画像を拡大し、交差した結び目が一本の骨を隣へ引っ張っているのを見つけ、どの紐を緩めればいいか伝えた。

二つ目の質問には答えなかった。

Maraが地図を指で叩いた。「彼には返事したの？」

「枠には」

「大切にされてる実感でいっぱいでしょうね」

Tarinの新しい工房滞在は、川上で数年続く。離れて暮らすか、私の母の谷へ近づくか、それとも彼に母の家へ入ってもらうか。彼は日付を求めた。私は条件ばかり返していた。

「今夜」私は言った。

Maraは地図の端を気象表の上へ折った。「昨日も今夜って言った」

「昨日は条件が悪かったの」

今度は笑ってくれなかった。

機材リストを仕上げた。予定が変わる前に、私は貨物スペースを予約した。ひびの入ったカップの跡が、下部湿地を横切るルートの上に緑色の湿った輪を残していた。

三日後の朝、私たちは夜明け前に出発した。

西部貨物線が現場用ケースを運ぶのは最初の一便だけだった。そのあと高く築かれた路盤は旅客列車のものになる。

Maraは窓にもたれて二十分眠り、誰かに気づかれる前に目を覚まし、どちらも否定した。Onlyは向かい側に座り、膝の上の観測点一覧と、終点ホームで待つ台車の筐体番号を照合していた。まだ新米だから何でも二度確かめる。けれど、そのことを褒められると腹を立てる程度には経験を積んでいた。薄手の雨衣は二種類の留め具で閉じていた。一つは交換したばかりで明るく、もう一つは使い込まれて黒ずんでいる。

湿地に入る前、線路は斜面にびったり張りつくように建った町を抜けた。深い軒の家々が、屋根付きの細道と開いた水路の上へ段々にせり上がっている。雲が切れるたび、濡れた庭のあいだから黒い太陽光ガラスの帯が光った。

西部盆地は少しずつ周囲に開けていった。埋もれた曲線の上に広がる低い湿地。古い水路跡には黒い水がたまり、葦は去年の茶色い穂を新しい緑の上に掲げている。柳の根が人の体重を支えられるだけの地面をつかんだところには、淡い色の小島が浮かぶ。赤いミズゴケが、錆のように泥炭を覆っていた。朝の空気には、濡れた鉱物質の土と、腐るかどうかもまだ決めかねている植物の甘い匂いが混じっていた。

列車は石と締め固めた土で高く築かれた路盤を渡って盆地を横切る。その下では、乾季には確かに地面らしく見えた場所まで延びた板道で、いまでは途中で終わっていることがあった。地面のほうが考え直したのだ。

最初の観測点で、台車の車輪が軸まで沈んだ。スポークの周りに黒い水がゆっくり上がってきた。

Maraは車輪を見て、それから私を見た。「あなたのルート、相変わらず完璧ね」

「印をつけたときは固かった」

「学生に注意してる『史料証言』って、だいたいそういうものよね」

最後の百歩はケースを担いだ。泥が長靴を引き、葦が筐体を叩いた。

二つ目の場所で、Onlyが上級技師の手を止めた。マストを締め切る直前だった。

「動いてます」

プレートは水平に見えた。彼女が角の一つを指二本で押すと、反対側の脚の周りから水がにじんだ。

「低い側に詰め物をすればいい」技師が言った。

「そうしたら、その詰め物まで観測点の一部になります」

彼は私を見た。

「移しましょう」私は言った。

マストを三十歩運び、支持脚を置くのがやっとの砂利の盛り上がりへ移した。Onlyは、失敗をきれいな一日の記録から消してしまわず、放棄した位置をログに残した。

正午までに、別の予定地点も地中設備のため使えなくなった。雨が灰色の幕になって湿原を横切り、水面に落ちる音が先に届いてから私たちを濡らした。

最後のケースを、白樺とハンノキの生える林の小島へ運んだ。板道を半分ほど進んだところで、若手技師の長靴が裂けた。Maraは、親切を大げさな儀式にする暇を誰にも与えず、彼女と荷物を交換した。

「ねえ」Maraが私に言った。「現場責任者の中には、天気を見る人もいるらしいわよ」

「見た」

「それで？」

「意見が合わなかった」

Onlyは笑いすぎて手すりにつかまった。ほんの一瞬、私たち三人は全身ずぶ濡れで、黒い水の上に高価な機器を載せたまま必死にバランスを取り、その頭上では貨物列車の出発ベルが鳴っていた。

夕方遅くには、四つの観測点が立ち、一つの予定位置だけが空白のままだった。帰りの列車には四分遅れた。

Mamaに、家へ着くのは翌日の午後になると連絡した。約束していた段々畑の相談の準備には間に合わない。

Onlyは閉じた観測点ログを膝の上に置いたままだった。

「明日？」

「明日」

外では、水面の上に低い霧が集まり始めていた。新しい観測点は葦の中に立ち、私たちがいなくても記録を続けていた。

母の家に着いたのは翌日の午後だった。二度乗り換え、最後のマイルは歩いた。家の荷車は石を運んでいて、叔父が先頭で牛を引いていた。低い光が、濡れた水路の壁と、その下で母が育てている黄色い根菜を照らした。家は私が子どものころから中庭を囲むように増築されてきた。古い石壁の上に新しい部屋が重なっても、台所と、中庭を横切る水路だけは動いていない。

食事はもう始まっていた。扉を開けると煙と熱い粉の匂いがした。弟は焼き石の前で丸い生地を返していて、肘まで粉だらけだった。母と二人の叔母は、土地台帳、斜面図、段々畑の壁の候補線三本でテーブルを占領していた。

「わざとだよ」弟は顔も上げずに言った。「決まってから来るほうが好きなんだ」

「私は、証拠のある決定が好きなの」

「じゃあテーブルを間違えたな」

年上の叔母が古い壁の線を叩いた。「ここに建て直す。貯蔵庫は動かさない」

「先に排水を北へ移さないと」弟が台所から言った。「水は西の木より上を越えた。古い線に戻したら、また壁を押し出すよ」

「あなたが見たのは一度の嵐でしょう」叔母が言った。「果樹園を見ている女たちは、何季もあの斜面を見てきたのよ」

「その一度の嵐で壁が動いたんだ」

「何を印につけたの？」私は聞いた。

弟は粉のついた板を持ってきて、テーブルの端に立った。最近の多雨季ごとに壁がどれだけ動いたかを示す印が三つ。四つ目は流出水の経路だった。

叔母が、誰が確認したのかと聞いた。

「誰も」弟は言った。「点検を延期しただろ」

母は黄色い根を二つに折り、片方を私の皿へ置いた。「どの線？」

「排水が壁を動かしたただけなら、流れを変えれば足りるかもしれない。下の盛土が緩んでいるなら、それだけでは足りない。木の根が石を持ち上げている可能性もあるけど、この順序だけでは証明できない」

「壁は一本しかないのよ」母が言った。

「危険の幅なら出せる」

「パンが焦げる前に？」

弟が生地を返した。「無理」

私は弟を見た。「今、言おうとしてたのに」

「質問の立て方が悪い理由を説明しようとしてたんだろ」

弟は笑っていた。私もつられて笑った。

いちばん若い叔母が、私の判断が外れた場合にどの案がいちばんましな失敗になるかと聞いた。私は真ん中の線を指した。斜面側へ少し寄せ、排水を北へ移す。貯水スペースの一部と、西の木の周囲の余裕を失う。それは、私が来る前に弟が引いていた線でもあった。

年上の叔母が台帳に親指を押しつけた。「中央部を建て直す。排水は北へ。木は次の多雨季まで残す」

母がうなずき、斜面図を畳んだ。

母が終える前に、弟はパンを私の横へ置き、焼き石へ戻っていた。叔母に塩を頼まれると、テーブルに加わりもせず手渡した。

「パン、おいしい」私は言った。

「その答えはちゃんとした質問に答えてる」

パンと、縁がやわらかく甘くなった黄色い根菜と、苦い葉物を食べているあいだ、叔母は北へ移す排水を土地台帳に書き込んだ。

外では、古い石の水路を水が果樹園へ向かって流れていた。私は下の門までその流れを追い、それから水路を離れて湖へ登った。Tarinが待つのを諦める前に、残った明るさに追いつきたかった。

湖の水は空気より暖かった。それでも最初の息が馬鹿みたいになるくらいには冷たかった。

Tarinは先に入った。私が岸で水相手に議論するのを見るのが好きなのだ。泳ぎ出しの石より先で浮かび上がり、髪が目にかかっていた。

「説得力あるわね」私は声をかけた。

「美しく苦しんでるんだ」

「それが仕事でしょう」

彼の新しい作品は向こう岸の浅瀬にあった。膝ほどの高さの葦の杵が三十、ゆるい曲線を描き、その中に薄い粘土の小杯が編み込まれている。夕暮れになると、小杯の水は小さな穴から下に張った繊維へ落ちる。朝には粘土にひびが入り始める。三日後には全部解体される予定だった。

私は、壊れるように作るものにどうして六週間もかけるのかと聞いたことがある。

Tarinは、もう存在しない氷を復元するのにどうして私が六年もかけるのかと聞き返した。

技術的には三つの点で間違っていて、人間的には一つの点で正しかった。だから切り捨てにくかった。

私も水に入った。冷たさが肩の上まで閉じた。しばらく何も言わずに泳いだ。Tarinのストロークは荒いけれど力強く、私のは効率がよくすぎて、楽しみを移動手段に変えていると責められた。角のように尖った峰の影の下を横切り、葦沿いに戻った。

まだ二十歩ほど離れているうちに、最初の粘土杯が水を放した。空洞のような音が湖を渡った。少し離れた場所で二つ目が応え、その先で三つ目が続いた。

音は旋律ではなかった。風、水の量、手で作った一つ一つの杯にある小さな誤差。そのせいで確実なものにはなりやうがない。それでも音の列は進んだ。ためらいがちで、美しく、岸辺が声に出して考えているみたいだった。

最後の杯が空になるまで、私たちは水に浮かんでいた。

「明日は違う音になる」Tarinが言った。

「明日は流れ込みの水位が下がってるかもしれない」

「それもある」

訂正されて、彼はうれしそうだった。

あとで平たい石の上に座ると、彼はざらついた乾燥布一枚で私たち二人を包み、東部盆地評議会からの依頼通知を見せた。公共広場を三晩。これまで一度も任されたことのない規模で作れるだけの材料支援。初日は、私の次の調査期間と重なっていた。

「現場の日程は動かせる」私は言った。

「予定表、見てないだろ」

「予定は知ってる」

「自分のはね」

初日の夜には行くと約束した。Tarinは三晩全部とは言わなかった。

湖の向こうでは、粘土の杯がもう乾き始めていた。短い役目は終わっている。杵だけが残し、ありふれた水辺に、ありふれた葦が立っていた。

長靴を履いているとき、雷鳴が湖まで届いた。

西の肩の向こうに雲が集まっていたのに、二人とも気づかなかった。一枚の黒い壁になって稜線を越えてきた。Tarinは濡れた乾燥布で依頼通知を包み、私は服を畳まずに鞆へ押し込んだ。最初の雨粒が葉を強く打ち、裏側の埃を振り落とした。

二つ目のつづら折りに着くころには、道が水路になっていた。片足の下で泥が動いたときTarinが私の手首をつかみ、十歩あとで今度は私が同じことをした。雨がまだただの面倒に思えたうちは、二人で笑っていた。やがて稲妻が下の木々を白く染め、数え終える前に雷鳴が来た。

「あそこ」私は言った。

道から少し外れたところに岩の庇があった。緑灰色の岩の筋の下、浅く暗い空間が口を開けている。上の斜面に雨水で崩れてきそうなものがないか確かめ、Tarinのあとに入った。

奥の床は乾いていた。風が入口の前を銀色の糸のような雨で横切っていく。私たちは足の間に鞆を置き、肩を寄せて座った。一時間前には存在しなかった天気にも備えるだけのまともな物を、どちらも持ってこなかったのも、また一枚の乾燥布を分け合った。

Tarinが岩にもたれ、少し身じろぎした。背後の石を手がなぞった。

「ここ、触ってみて」

肩の高さの表面は鈍く、なめらかだった。光るほど磨かれているわけではない。周囲の割れた岩肌より、摩耗して柔らかくなっている。手のひらを当てた。すぐに分かった。背中の高さ。待つ人なら自然に体を置く場所。

「ここで雨宿りした人、昔からずいぶんいたんだろうな」Tarinが言った。雨が入口を埋め、道を隠している。「これから、たくさん来る。ここにいると、時間そのものに触れられる気がする」

「触ってるのは冷たい岩よ」

「それもある」

彼は壁から私の手を取り、指が温まるまで両手で包んだ。誰がここを使い、山を何と呼んでいたのか。答えを決めないまま、嵐が力を使い切るのを見ていた。雷が東へ離れていくと、また一粒ずつの雨音が聞き分けられるようになった。

Tarinが先に外へ出て、岩庇の向こうが川でもあるように私へ手を差し出した。

帰り道は、上がりかけた雨に濡れて光っていた。

# お読みいただき、ありがとうございます

『Echoes』のサンプル第1章をお読みいただき、ありがとうございます。楽しんでいただけたなら嬉しいです。続きを読みたい方、または音声で読みたい方は、こちらから入手できます。

Amazonで現在購入できるのは英語版のみです。英語のペーパーバック版もAmazonで購入できます：

<https://www.amazon.com/dp/B0HFKGSD7M>

Gumroadでは、DRMフリーの電子書籍をEPUBおよびPDFで、中国語、オランダ語、英語（原著）、フランス語、ドイツ語、ハンガリー語、日本語、ロシア語、スペイン語で入手できます。英語以外の翻訳版は機械翻訳です。英語のオーディオブックもGumroadで入手できます：

<https://zsviczian.gumroad.com/l/echoes>

『Echoes』がどのように作られたのかに興味があれば、執筆と制作の舞台裏を紹介した動画をご覧ください：

<https://youtu.be/AzXP6SpD1XU>

Sketch Your Mindニュースレターにもご登録いただけます：

<https://sketch-your-mind.com/newsletter>

『Echoes』と少しの時間を過ごしてくださり、ありがとうございます。

-Zsolt